

「ひな祭り」のモノ資料からみる近代化 駿河雛具の御殿飾りを中心に

A Study of the Modernization of Hinamatsuri Festival Seen in Physical Materials : With a Focus on the Goten-kazari of Suruga Hina Dolls
MATSUDA Kayoko

松田香代子

はじめに

「ひな祭り」は、今や全国各地で春の始まりを告げる観光イベントのひとつになっていく。静岡県賀茂郡東伊豆町稲取の「雛のつるし飾りまつり」は、全国に先駆けておこなわれる一月二〇日から三月三十一日まで二か月間の観光行事である。緋毛氈の上に並べられた雛人形と縮緬細工の吊るしものは、まだ冬の季節風が吹きぬける中、ひとときわ鮮やかな彩りをはなっている。この稲取温泉協同組合が主催するイベントは、平成二十七年で第一八回を迎え、全国の「つるし飾り」「つるし雛」の火付け役となった。

このような「ひな祭り」のイベントは、いつ、どのようなきっかけで始まっているのであろうか。前述の稲取温泉では、バブル経済の崩壊後、激減した観光客を呼び戻すため、旅館組合の女将たちが始めたという。

このほか愛知県豊田市足助町では、二月七日から三月八日まで「中馬のおひなさんin足助」が開催される。平成一一年に、地域活性化を目的

に地元住民が始め、平成二十七年で第一七回を数える。足助町の「雛祭り」は、足助街道（中馬街道）に沿って並ぶ伝統的な建物に土雛や内裏雛を飾り、町並み散策をしながら雛祭りを楽しんでもらうという催しである。

現在、各地では地域に残る文化遺産を、地域振興・地域活性化の核にすえてさまざまな取り組みがおこなわれている。「ひな祭り」イベントもそのような流れの中にあるといえる。しかし、伝統的な民俗行事は雛祭り以外にも多々ある。それではなぜ、「ひな祭り」



稲取温泉の雛のつるし飾り（東伊豆町）

イベントに特化して全国的に大流行しているのであろうか。

本稿では、「ひな祭り」イベントの主役である雛人形・雛具、中でも御殿飾りと呼ばれるモノに着目して、近代化の中でそれらが大量生産された経緯をたどり、現代の雛祭りを検証していくこととする。

1 「ひな祭り」における雛巡り

ビッグひな祭りin勝浦の「百段のひな壇」

徳島県勝浦郡勝浦町では、二月二〇日前後から四月五日頃まで、四角錐のピラミッド型にひな壇を作り、そこに置ける限りの雛人形を並べる「ビッグひな祭り」がおこなわれている。ハメートルもの高さのひな壇に、おびただしい数の雛人形が並んでいる景色は、広い会場の中でも圧巻である。

一面に二五段、四面で「百段のひな壇」飾りは、昭和六三年（一九八八）四月に二日間のひな祭りのイベントとして始まった。平成二七年で第二七回を迎え、四半世紀にわたるイベントは、町の活性化を目指したものであった。勝浦の研究会でおこなわれた「ビッグひな祭り」実行委員会の講演をもとに、その経緯をたどってみよう。⁽¹⁾

勝浦町の特産品はミカンである。ミカン栽培は昭和三〇年代に最盛期を迎え、「ミカンさえ作っていれば東京の大学へ行かれる」と言われたほど景気が良かった。ミカンは高価で栽培農家でさえ普段は食べられなかった黄金時代もあったが、過剰生産による価格の急落でミカン農家は激減した。また、全国的にもミカン生産地が大打撃を受けたのは、オレンジの貿易自由化によるもので、さらに勝浦町では昭和五六年（一九八一）二月の大寒波でミカンの木が枯れ死する大災害が追い打ちをかけたという。

そこで、勝浦町役場の職員有志一〇人が町おこしグループ「ちえぶくろ」を立ち上げ、三年間かけて歴史を学び、視察に出かけ、講師を呼ん

で学習会をしたという。そして、各家庭に仕舞われていた雛人形を持ち出し、「百段のひな壇」に飾ってイベントにしようということになった。⁽²⁾百段の百にインパクトを持たせ、とても数が多い、パワフルな数として「百」という数にこだわった。

「百段のひな壇」は、当初は町の体育館を利用して飾った。全国から一万余体を超える人形が贈られてくるため、五〇〇人のボランティアで飾り付けをおこなった。イベントが終わると一気に片付けをし、保管する人形は使われなくなったミカンの貯蔵庫へしまっていた。しかし、準備・片付け等に短時間の労力を要する作業は、ボランティアの高齢化が進んで困難を極め、ひな祭り会場の常設館が必要となった。そこで、平成一六年に旧木工所を購入して改修し、第一七回から「人形文化交流館」として開催している。これにより、会期が終わると飾り付けた人形に白い布をかけておき、翌



御殿飾り（ビッグひな祭り in 勝浦）



百段のひな壇（ビッグひな祭り in 勝浦）

年まで収蔵しておくことができるようになった。

「第二七回ビッグひな祭りin勝浦」は、人形文化交流館で、高さ八メートル、幅二〇メートルの二五段のひな壇を四面作ってピラミッド状に組み、全国から贈られてきた雛人形を飾っておこなわれた。³⁾会場には、「百段のひな壇」以外にもひな壇などが作られ、そこに飾られる雛人形は約三万体制であるという。

人形供養と里親制度

勝浦町の人たちが「ひな祭り」を地域活性化の核にすえた理由は、「家庭で不要になったり、物置で眠っている雛人形を全国から集めて雛飾りと供養をしよう」⁴⁾という思いであった。つまり、単にイベントで飾るために雛人形を集めてきたわけではなく、そこに「供養」という宗教的な行為がともなっていたのである。

人形供養祭は全国的にも神社や寺院などでおこなわれているが、供養料は様々であり、勝浦でも当初は志納であった。人形供養は、イベント以前から地元の大宮八幡神社でおこなっていたが、イベントが始まってからは神職に会場に来てもらい供養の神事をしてもらっている。イベントを開催する前に供養をして人形の魂をぬき、イベント終了後は焼却処分をするというのが当初からのスタイルであった。

当初、勝浦ではイベント終了後に神社境内で井桁に薪を組んで人形を焼却していたが、ダイオキシンのことから環境問題に発展した。そのため、痛んでいる人形だけ産業廃棄物として処分し、現在は八万体制の人形を保存している。

毎年、全国から集まってくる大量の人形を保存していることから、次の段階として、人形の「里親制度」という新たな方式を生み出した。送られてくる三万体制の人形は、いかに会場が広くてもすべて飾りきることはできない。そこで、申し出があった各地の展示会場へと人形を貸し出

すことを始めた。徳島城博物館では、毎年「ひな人形の世界」という企画展をおこなっている。ここには、NPO法人寄贈というかたちで大型の人形を譲渡した。また、阿波踊り会館や徳島空港などにも飾り付けに行ったり、学校や公共施設に貸したりしている。東日本大震災の被災地にも貸し出し、出張してピラミッド状のひな壇を飾り付けに行った。

「全国勝浦ネットワーク」の縁で、二〇〇一年（平成一三）には千葉県勝浦市に三千体制の雛人形を贈った。これを機に、勝浦市では「かつうらビッグひな祭り」が始まり、現在では譲り受けた八千体制の人形に、寄贈を受けたものも加え三万体制以上の雛人形が飾られている。また和歌山県那智勝浦町には、平成二三年の台風一二号災害の復興を祈念して雛人形を贈り、翌二四年から「南紀勝浦ひなめぐり」がおこなわれている。

一方、勝浦町でもメイン会場以外での雛巡りがおこなわれるようになる。勝浦町の中心部から勝浦川を遡って西へ進むと坂本地区がある。少子高齢化が進み、地域コミュニティの拠点であった町立坂本小学校が平成七年に廃校となった。そのため、旧校舎をグリーンツーリズム事業が実践できる農村体験宿泊施設「ふれあいの里さかもと」として改修し活用することになった。

「ふれあいの里さかもと」は平成一四年三月にオープンし、同施設内の体育館にて、ひな祭りイベント「おひな様の奥座敷」を開催した。「ビッグひな祭りin勝浦」との連携でこない、町内外の有志による創作飾りや演奏会なども催している。さらに、平成一八年には「ふれあいの里さかもと」の体育館に留まらず、「坂本おひな街道」として地域全域の催しへと広げていった。「坂本おひな街道」は、坂本地区を東西に走る街道に面して雛飾りを各家々の工夫でおこなうイベントである。このような地域あげての雛飾りは、町内の西岡商店街の「西岡おひな街道」や勝浦中央商店街の「横瀬おひな街道」などにも拡大し、まさに勝浦町は「おひな様一色」となる。⁵⁾

「おひな街道」では、豪華な雛人形をひな壇に飾ることよりも、かつておこなわれていた雛遊びを再現し、「雛見の楽しさ」を自由な発想で演出することに主眼がおかれている。

名古屋の「文化のみち 雛巡りスタンプラリー」

平成二六年二月八日から三月一六日にかけて、愛知県名古屋市内では「文化のみち 雛巡りスタンプラリー」が開催された。これは、市内中心部の名古屋城・名古屋市政資料館・文化のみち撞木館・文化のみち二葉館・名古屋陶磁器会館・徳川園・徳川美術館・蓬左文庫の八か所の施設でおこなわれている雛祭りにちなんだイベントを巡り、そこに設置されているそれぞれデザインの異なるスタンプを台紙に捺すというものである。主催は名古屋文化遺産活用実行委員会で、平成二五年度の「文化遺産を活かした地域活性化事業」の文化庁芸術振興補助金を受けておこなっている。四施設以上のスタンプを集めると記念品としてポストカードがもらえ、すべてのスタンプを集めるとスタンプ台紙の雛飾りが完成する。

名古屋観光コンベンションビューローの公式サイトによれば、名古屋城から徳川園にいたる「文化のみち」エリアには、江戸から明治、大正へと続く名古屋の近代化の歩みを伝える貴重な歴史遺産が残されている⁽⁶⁾という。

「文化のみち」エリアの最も東にある徳川園は、尾張藩二代藩主光友が隠居所として造営した大曾根屋敷を起源としている。明治二二年（一八八九）から尾張徳川家の邸宅となり、昭和六年（一九三一）名古屋市に邸宅と庭園が寄贈された。平成一六年には日本庭園に再整備して開園し、今日にいたっている。この徳川園に隣接して徳川美術館、蓬左文庫が建てられている⁽⁷⁾。

名古屋は徳川御三家筆頭の尾張藩藩主の本拠地であり、幕末まで名古屋

屋城の城下町として文化の中心地であり発信地であった。尾張徳川家に嫁いできたお姫様は、それぞれ豪華な雛飾りを嫁入り道具のひとつとして持参してきた。お姫様たちが持参してきた雛人形を飾る催しは、徳川美術館の特別展「尾張徳川家の雛まつり」として、毎年二月上旬から二か月にわたっておこなわれている。十一代藩主斉温夫人福君の雛道具、十四代藩主慶勝夫人矩姫の雛人形、尾張徳川家十九代義親夫人米子・二十代義知夫人正子・二十一代義宣夫人三千子の三世代にわたる雛段飾りのほか、正子の実姉秩父宮妃勢津子妃の雛人形と雛道具など、「いろいろが可愛らしく、しかも優雅で品格に満ちた品々」を展示している⁽⁸⁾。

雛人形として最も古いのは、十四代夫人矩姫の雛人形群である。矩姫は、福島二本松九代藩主丹羽長富の三女として生まれ、嘉永二年（一八四九）に興入れた。矩姫の雛人形・雛道具は、束帯姿三対、直衣姿一対、狩衣姿一対の有職雛と、五人囃子（雅楽）一揃、大張子二対、雛道具八〇点余りが伝えられている。雛道具は、梨子地に松竹梅の折枝と唐草文様を配し、銀の金具を打った豪華なつくりとなっている。このほかにも、「御内証」という箱に収められたブライベートな場で飾られる内裏雛飾りがあり、前述のものより小ぶりの雛人形である。また、後に購入したとされる牡丹唐草蒔絵がほどこされた雛道具は、徳川十一代将軍家齊の所持品だったという言い伝えがある⁽⁹⁾。

十一代夫人福君は、天保七年（一八三六）に五摂家筆頭の近衛家から嫁ぎ、京都から江戸に向かう行列は木版に摺られたり、流行り歌にうたわれたりしたほど華美を尽くしていたという。その嫁入り道具は、「現存する江戸時代の大名婚禮調度としては最も大揃えの遺例として知られ」⁽¹⁰⁾嫁入り道具と同じように作られた精緻な雛道具八〇余件も持参した。これらには、徳川家の家紋である葵紋と近衛家の家紋である抱牡丹紋があしらわれている。また、近衛家の抱牡丹紋のみをあしらった雛道具四〇余件も別に持参しており、「自分の分身である人形に対しても同

じような道具揃えの調度品を用意した」と考えられている。⁽¹⁰⁾

尾張徳川家に嫁ぐ女性の雛人形や雛道具は、雛遊びのために用意されるだけではなく、徳川御三家筆頭という家柄に恥じない嫁入り道具の一部として念入りに準備されている。つまり、徳川家への嫁入りは江戸時代の大名家のテキストであり、その嫁入り道具もまた華美を尽くして民衆に誇示するモノであった。その中に精緻な細工物である雛人形と雛道具もあり、嫁入り道具のミニチュアとして、同等あるいは同等以上の価値があることを示す貴重な財産であったといえる。

江戸城大奥の雛祭りには、「雛拝見」という雛飾りの行事があったといい、大奥に仕える者の親戚縁者にあたる人びとも参観を許されたという⁽¹¹⁾。美しく豪華な雛飾りを見るところという行事は、現在の雛巡りイベントの原点であろう。

愛知県の「ひなまつりスタンブラリー」

平成二六年二月八日から三月一六日まで、愛知県内の市立・町立博物館を中心に「雛祭り」展のスタンブラリーがおこなわれた。参加施設は、愛知県下水道科学館・岩崎城歴史記念館・大口町歴史民俗資料館・喜楽亭（豊田市）・幸田町郷土資料館・田原市渥美郷土資料館・田原市博物館・知多市歴史民俗博物館・豊田市郷土資料館・豊田市民藝館・豊橋市二川宿本陣資料館・名古屋市博物館・東浦町郷土資料館・碧南市藤井達吉現代美術館・みよし市立歴史民俗資料館の全一五館である。このうちの三館をまわれば3館賞、七館なら7館賞、すべてまわればパーフェクト賞として、賞品をもらうことができる。この翌年の二七年、一五館から八館に縮小されたが、「ひなまつりスタンブラリー」は続けておこなわれた。⁽¹²⁾

愛知県内の博物館や資料館、美術館などでこのように「ひなまつりスタンブラリー」が盛んになった理由は不明だが、その端緒となったのは

名古屋の「文化のみち 雛巡りスタンブラリー」であることは想像に難くない。そして、各施設には雛祭りの季節に企画展ができるほどの収蔵品があるらしいことも予想できる。愛知県下水道科学館のように、雛祭りとは縁遠いような施設でも、一年に一度、雛人形を出して飾ることで華やかなムードになり、子どもを中心に集客が期待できること、子どもに同伴する両親や祖父母たちの世代にも昭和のレトロな雛飾りが喜ばれること、など利点はいろいろある。スタンブラリーにすることで多くの施設に足を運び、そこでの工作や菓子作りなど雛祭りにちなんだイベントに参加してもらうこともできる。「ひなまつりスタンブラリー」は、雛祭りの歴史を学ぶためでも雛祭りを疑似体験するためでもなく、より多くの雛飾りを見て歩き華やいだ雰囲気を楽しむことが目的なのである。

このように多くの雛飾りの収蔵品を、毎年雛祭りの季節に大がかりに展示するようになったのはなぜであろうか。勝浦町には、インターネットによる呼びかけに応じて全国から雛人形が万単位で送られてくる。尾張徳川家など大名家に伝来するような豪華な雛人形でなくても、旧家や民家に伝わる歴史ある思い出のこもった雛人形も多い。また、御殿飾りや七段飾りなど、ある時期に大量に売り出されたセットものも各展示場でよく目にする。世代交代や住宅事情などそれぞれの理由があるだろうが、家庭で眠っている「飾らなくなったひな人形」の行き先の選択肢として、博物館や資料館などの文化施設への寄贈があげられる。そこならば、「捨てる」のではなく、歴史も思い出も文化財資料として「活かす」てもらえるからである。

2 駿河漆器から駿河雛具・駿河人形作りへ

静岡市浅間通り商店街の雛市

静岡市市街地では、雛祭りを三月三日におこなう。その前夜をヨイ

ゼック（宵節供）と称して、菱餅やちらし寿司、アサリやハマグリなど貝の吸物、ワケギ（分葱）のぬた（酢味噌和え）、甘酒などを供えて祝う。某家の雛飾りは三段のひな壇で、最上段に内裏雛一对、中段におぼこの人形を並べ、下段には菓子や果物などを日替わりで供える。またひな壇の脇にガラスケースに入った藤娘、道成寺の踊人形などを並べる。内裏雛は、長女が生まれた昭和二年（一九五四）の初節供に、その子の祖父母から贈られた木目込人形である。おぼこの衣裳人形は、次女が生まれた昭和三四年（一九五九）の初節供に贈られたものである。

これらの人形は、静岡市内の人形店で購入された。当時、市内で雛人形を売る店は多く、しかも、静岡浅間神社の門前町である浅間通り商店街には常設の人形店もあったが、三月と五月の節供に合わせて節供人形を販売する店が軒を連ねていた。浅間通り商店街の雛市ともいうべき賑わいは、一九六〇年代までみられた。

浅間通り商店街は、通称赤鳥居と呼ばれる鳥居から神社まで続く参道に並んだ商店街で、宮ヶ崎町と馬場町という正式の町名がついている。静岡浅間神社は、かんべ神部神社・あさま浅間神社・おおとし大歳御祖神社の三社およびその境内神社の総称であり、浅間通り商店街は大歳御祖神社の社殿に向かって伸びる参道沿いにある。この大歳御祖神社は、もとは奈吾屋社という延喜式内社であり、安倍（安倍）の市の守り神だったという。阿倍の市は、現在の静岡市本通



静岡市某家の雛飾り

一丁目ないし五丁目に沿った両替町・上石町・梅屋町・人宿町・七間町方面にわたる方四百メートルの範囲と推定されている⁽¹³⁾。

『駿国雑志』にみられる一九世紀の雛祭り

静岡市内で初めて雛市が立ったのは近年のことではなく、江戸時代からそのような市が立っていたことが知られている。『駿国雑志』は、天保一四年（一八四三）に刊行された駿河の地誌のひとつである。幕臣阿部正信が地理、歴史、風俗、人物など幅広い分野にわたって著わしたもので、全四九巻にもおよぶ。巻之一五は「年中行事」で、府内村里（駿府近在の農家など）、府中（駿府武家）、市中（駿府町家）、村里（駿府外の農家など）の年中行事を書き分けている。三月三日の項は次のようである⁽¹⁴⁾。

〔三日〕巳の尅頃御番衆御城代屋舗へ出、小書院二ノ間に於て御城代面謁有り。

今日上巳の節句を祝ふ尋常の如し。

府内村里今日雛の棚飾りあり、二月廿八日より出し五日収む以て例とす。凡府中初雛は其妻の里より、雛一对を贈りて賀儀を述ぶ。其雛は必内裏と称する雛を用る也。

今日府内村里艾の草餅を搗き雛に供す、尋常の如し。

今日桃花を雛の瓶にさし、或は酒に加して吞、尋常の如し、故に桃の節句と云へり。

今日より五日迄、安倍川二丁目遊女屋、府中江川町黒金屋佐次右衛門、四足町蘆名屋幸三郎、呉服町一丁目小西源兵衛等数品の雛を貯へ夜に入て見せしむ、故に諸人此門戸に群をなして見物す。其制多くは立雛にして、鎧武者或は伎女獅子舞等也。人宿町呉服町の邊市に於て売れり皆京都の産也。村里雛を飾るは二月卅日、或は此月

朔日兩日の内を用ひ、五日収むるを例とす。其納る筈に供する處の餅を紙に包て入置き、来春出し飭る時、炙り食ふ、是を雛の土産と云へり。其飢なるは紙雛にして後に桜の造花を差たり。又男子あるものは雛の棚に必天満天神の尊像を居ゆ、其儲雛の如し。故に男子生る、の年上巳の日を初の節句と號け、親戚互に此尊像を送りて賀儀を述べ、以て風俗とす。(以下略)

これらを整理すると、民俗的にも重要な指摘ができる。

- ① 御番衆は御城代屋敷に出向き、小書院二の間で面謁する。上巳の節供は通常通り祝う。
- ② 近在の農家では、二月二日から三月五日まで雛の棚飾りをする。三日にはヨモギの草餅を搗いて雛に供える。
- ③ 武家では、初節供に妻の実家から一対の内裏雛が贈られて祝いをする。
- ④ 三日には桃の花を雛の花瓶にさしたり、酒に入れて呑んだりする。そのため、桃の節供という。
- ⑤ 三日より五日まで、安倍川二丁目の遊女屋、府中江川町の黒金屋佐次右衛門、四足町蘆名屋幸三郎、呉服町一丁目小西源兵衛等、所蔵している雛を夜になると見せるので、人びとは門前に群れをなして見物する。その多くは立雛で、ほかに鎧武者や技女、獅子舞など(の人形)がある。
- ⑥ これらの雛は、人宿町や呉服町あたりの市で売っている。すべて京都産の人形である。
- ⑦ 村里では、雛を飾るのは二月三〇日あるいは三月一日で、五日に仕舞う。納める箱には雛に供えていた餅を紙に包んで入れ、翌年の春、雛を出して飾るときに炙って食べる。これを「雛の土産」といっている。

- ⑧ 雛の粗雑なものには紙雛に桜の造花を差したものがあつた。
- ⑨ 男子がいる家では、雛の棚に必ず天満天神の像を据える。男子が生まれた年の上巳の日は初の節供といい、親戚が互いに天神像を贈つて祝うのが習慣となっている。

駿河の雛祭りとは太天神の製作

阿部正信は幕臣であつた。駿府には文化一四年(一八一七)から一年間赴任して、江戸に帰任している。江戸での雛祭りは承知しており、駿府での見聞記録は信頼性があるといえる。⁽¹⁵⁾『駿国雑志』にある雛祭りは、駿府に赴任した武家が江戸風を持ち込んだ可能性も高いが、町家や近隣の農家などの習慣には駿府独特の地域性がみられる。中でも、⑤雛見は大店(と思われる)町家にて夜おこなわれており、⑥雛市(阿倍の市)で売られている雛はすべて京都製であることが知れる。さらに、⑦雛を仕舞う際には「雛の土産」という餅を紙に包んで入れるといい、翌春にそれを取り出して食べると記されている。

この「雛の土産」は、現在も御殿場市新橋で伝えられている習慣である。御殿場市は近世末、駿河國小田原藩領に属し、富士山東麓地方にある。新橋では、餅やあられを紙に包み、人形の箱に入れて仕舞ったという。『御殿場市史』にも、同市二枚橋で雛を仕舞うときには「お弁当」といって四角い切餅を紙に包んで入れるとあり、同市駒門や中畑でも「みやげ餅」と称していたといふ。⁽¹⁶⁾

⑨雛祭りに男子の天神を飾ること、男子の初節供も上巳におこない、親戚から天神人形が贈られることなども注目される。これも駿河地方(静岡県中・東部地方)で盛んにおこなわれてきた民俗である。

全国的にも、三月節供に内裏雛とともに天神を飾る習慣があるのは、静岡県のほか、愛知県豊橋市、福井県越前地方、兵庫県稲畑地方、和歌山県御坊地方、鳥根県、鳥取県、岡山県美作地方、愛媛県松山地方など

各地にあるという。

そして、静岡県では江戸末期から志太地方（現藤枝・焼津市）で、桐塑による練物製の天神人形を製作し販売していた。「志太天神」と呼ばれ、

大阪練天神を模したものと推測されている。これと平行して、ビロウド地の衣裳天神も製作され、さらに明治初・中期には金襴地の衣裳天神が製作されるようになったという。しかし、衣裳天神人形の頭は当初、埼玉県の鴻巣や岩槻系のもので流入したと考えられている。⁽¹⁷⁾

駿河雛具・駿河人形の誕生

前述した静岡浅間通り商店街の雛市は、第二次大戦後の数十年間に成立したものであった。その背景には、静岡市が雛道具と雛人形の生産地のひとつとして発展したことにある。雛具、雛人形は限られた季節に取引される⁽¹⁸⁾ 際物であり、現在も全国人形見本市に先駆けて五月下旬に「静岡新作雛具雛人形見本市」が市内各所で開催されている。

駿河雛具（雛道具）の生産は、古くからの駿河漆芸の技術を活かして発達したものである。明治二〇年代の『東京買物独案内』（一八九〇年刊）には、日本橋区本石町二丁目十軒店に、「静岡出店・諸国漆器問屋・雛小道具類・静岡屋戸塚孝兵衛」という名の店がある。静岡から江戸店を出して、漆器類や雛道具をあつかっていたことがわかる。⁽¹⁸⁾『静岡木漆産業史』（一九六〇年）には、その経緯が詳細に記されており、現在も静岡の伝統工芸である漆工芸をともなう駿河漆器・駿河蒔絵・駿河塗下駄・駿河雛具などは、静岡県郷土工芸品として指定されている。ま



志太の衣裳天神（藤枝市）

た、平成六年には「駿河雛具及び駿河雛人形」は国の伝統的工芸品に指定されている。

なお、本稿では従来「静岡雛具」と称していた雛具業界で、県の郷土工芸品や国の伝統的工芸品として認証されて「駿河雛具」と称するようになったことから、「駿河雛具」という呼称で記述することとする。

静岡での雛具作りは、すでに江戸時代末期から始まっていたが、一般に知られるようになったのは明治初期以降である。当初は、東京から職人を招いて製造技術を学んだというが、本格的に製造をおこなったのは明治一五年（一八八二）頃、両替町の坪井某だったという。製品は三ツ揃、十三揃、三棚、重箱等で、筆書きの蒔絵がほどこされ、東京十軒店の静岡屋で販売した。「明治二六年（一八九三）頃に市内で、はじめ雛道具の店頭販売を海野善次郎が行ったということであり、一般に三月節句の雛道具飾りはこの頃までは、この地方には一部を除いてあまり普及していなかった」と考えられている。⁽²⁰⁾つまり、駿河雛具は静岡の製品を、東京の人形市である十軒店に出荷して販売していたのが始まりであった。地方ではそのような豪華な雛具の需要はなく、雛飾りとして普及していなかったからである。

明治時代中頃、日清・日露戦争後の不況で内外の需要の減少と共に漆器業界も低迷したが、雛具業界だけはそれほどの影響がなかったため、他の業種から雛具の職人に転向する者が増えた。さらに、大正一二年（一九二三）の関東大震災後に、東京の罹災職人が静岡に疎開して移住し、雛道具も手がけるようになって発展に拍車がかかったという。「御殿などは屋根が付き、各種の工夫も行われて繊細優雅な技巧は他の追随を許さず各地に好評を博して」、「季節前は東西市場より注文が殺到するのを例とした」。さらに、「昭和三年（一九二八）の御大典（即位式）を契機に静岡製の紫宸殿作りの御殿が全国を風靡し、各種の雛道具とともに活況を見た」という。⁽²¹⁾

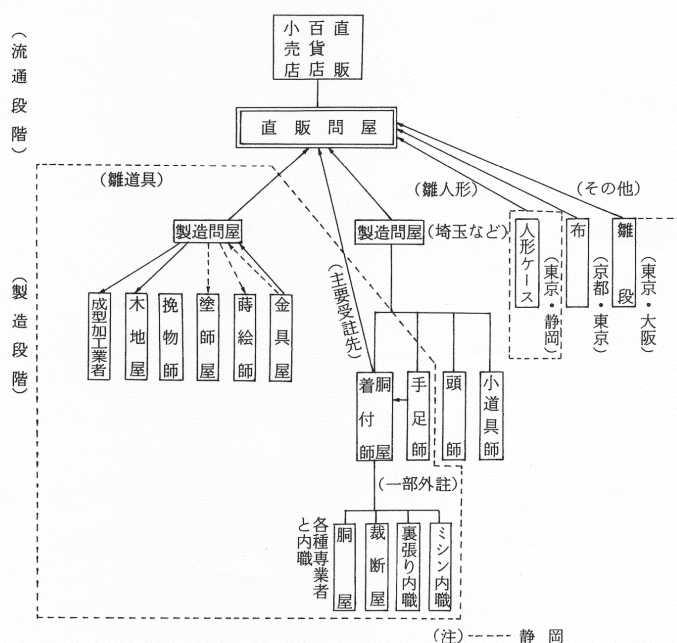


図1 静岡の雛具・雛人形の生産と流通
（『静岡雛具人形百年史』より転載）

雛具は漆器の製造・流通形態を踏襲しており、家内工業的製造問屋をそのまま雛具業界が受け継ぎ、大正時代を経て昭和二〇年（一九四五）の終戦まで続いた。⁽²²⁾ すなわち、「漆器や塗下駄の生産構造と同じように問屋制のもとで、雛具作りの五職（指物・挽物・塗物・蒔絵・飾金具の各下職）としてマチぐるみの生産形態をとり、家内制手工業による徹底した分業制によって大量生産体制を確立」したのである。静岡の漆芸産業は、安くて優美で常に新しいデザインを手がけた大衆向きの製品を得意としてきた。それが、「子供の民俗行事が大衆文化として広まってい

く過程で符合」した。大正期から昭和三〇年代まで人気のあった雛御殿は、やがて全国の雛具市場を風靡することとなったという。⁽²³⁾

一方、静岡市での雛人形生産は新しく、昭和六、七年（一九三一、三二）頃から本格的に始められた。当初は、埼玉県の岩槻や京都から人形師を招いて技術を導入したが、静岡の温暖な気候が頭生産に不適切だったといい、昭和一八年（一九四三）頃を境に戦時統制に入るとともに天神人形以外は生産をやめてしまった。あるいは、人形の頭の製作は天神人形のような大きなものは可能だったが、雛人形のような小さくて精緻な頭はほとんど出来なかったという。⁽²⁴⁾

そこで、東京や岩槻、京都などから人形の頭だけ移入し、人形の胴体部分の生産を研究努力し、静岡の「町ぐるみ工場形態を上手に生かした手工芸の分業専門化量産化」にいたった。一九七〇～八〇年代には飛躍的に発展して、生産量は全国のトップの地位に躍進した。昭和六一年（一九八六）現在、「静岡で生産された雛人形の胴が、埼玉、東京、名古屋、京都、大阪などに送られそれぞれの頭をつけて生産地〇〇製として出荷されるという流通形態が定着しつつあった。人形メーカーは約三五軒、職人・製造従事者（内職も含めて）約二五〇〇人であった。生産は職人も殿・姫の親王、五人囃子などに分かれて専門化し、裁断・仕立・振付け（着せ付け）などに分かれ、流れ作業の手工業生産であったという。⁽²⁵⁾

3 駿河雛具の御殿飾り

博物館施設に展示された御殿飾り

博物館や資料館・美術館で開催される雛祭り展では、収蔵していたり借用したりした雛飾りが展示される。美術工芸品としての価値や、歴史資料的価値が高いものもあるが、民俗文化財資料として注目されるものもある。

平成二四年、静岡県浜松市博物館では二月二五日から四月八日までの約一か月余り、収蔵品展「雛人形展」が開催された。姫君の「ひいなあ

そび」・江戸の雛人形・上方の雛人形・江戸の雛市の様子・播州の「七夕さんの着物」・松本の「七夕雛」という六つのテーマにしほって、雛人形の展示がおこなわれた。この中で、ひときわ目を引いたのはいくつかの御殿飾りであった。いわゆる京都製と思われる源氏杵飾りのほか、紫宸殿飾りなど、御殿飾りと呼ばれる資料群である。

平成二六年二月一日から三月二三日まで、愛知県日進市の岩崎城歴史記念館でも平常展「おひなさま」が開催された。ここでも、御殿飾り雛が四点出品されていた。このうち二点は、みよし市立歴史民俗資料館所蔵であった。出品目録には、御殿飾りの購入年代と考えられる年号が記され、昭和二年・同六年・同八年・同二五年とあった。

平成二六年二月七日から四月五日まで、愛知県田原市の田原市博物館では「ひな人形と初風展」が開催された。展示された御殿飾りは一二点、このうち源氏杵飾り（大正〇昭和初期）は一点であった。御殿飾りの購入年代は、昭和三年・同七〇八年・同二九年・同三〇年（二点）・同三〇年代前半・同三二年・同三四年（二点）・同三七年・同三八年となっている。

前述したように、岩崎城歴史記念館と田原市博物館は「ひなまつりスタンプラリー」の開催施設である。このスタンプラリー開催一五施設のうち、雛人形や雛祭りに関する資料を収集しているのが、みよし市立歴史民俗資料館である。岩崎城歴史記念館にもその収蔵品の一部を貸し出していることから、雛祭り・雛人形資料はかなりの量であることが推測される。

みよし市立歴史民俗資料館では、平成二六年一月二五日から三月二三日まで、冬季企画展「第三回 ひな人形展」時代を彩ったひな人形たち」が開催された。昭和五七年（一九八二）一月に開館して以来、毎年冬季企画展としてひな人形展を開き、同時にひな人形の寄贈をうけてきた。これらの資料の展示図録は、第六回と第二六回の企画展に合わ

せて二度発行された。このうち、平成二〇年（二〇〇八）の「第二六回 ひな人形」人形たちの移り変わり」展示図録をもとに、御殿飾りの資料をみていきたい。⁽²⁶⁾

みよし市立歴史民俗資料館の御殿飾りの形態

この展示図録の図版目録には、「御殿飾りひな人形」No.12からNo.37までの二六点が記載され、うち源氏杵飾りの木目込人形が一点ある。当館学芸員塚本弥寿人による図録解説「三好町立歴史民俗資料館所蔵ひな人形からみたひな人形の移り変わりについて ―御殿飾りを中心に―」では、御殿飾りの形態の分類と変遷を考察している。なお、本書で取り上げる御殿飾りひな人形とは、「江戸時代以降に関西や武家、公家などで飾られた御殿を含むひな飾りではなく、この地域において、昭和時代以降、各家庭へと広まった御殿を含むひな人形」をさしている。また本書の資料は、大阪などから贈られた京阪地域の特徴を有するものは除き、愛知県みよし市を中心とした西三河およびその近隣の地域を対象としている。雛人形の変遷を要約すると、次のようになる。

- ① 明治時代から昭和時代初期にかけ、ひな祭りには主に三河土人形が飾られた。
- ② 明治三〇年代以降に、内裏雛の衣装ひな人形が飾られるようになる。
- ③ 昭和時代初期から、御殿飾りのひな人形が飾られるようになる。
- ④ 昭和三〇年代から、屏風段飾りのひな人形が飾られるようになる。

さらに、塚本は御殿飾りについて、おもに間取りを中心に独自の形態分類をおこない、購入年代で変遷を追っている。

- a. 独立型（主殿のみ）……昭和二年・同六年
- b. 片廊下型（主殿の片側に廊下がつく）……大正一四年から昭和二一年まで

c. 両廊下型（主殿の両側に廊下がつく）……昭和二年から同一四年まで

d. 両側折衷型（両廊下型の片側が別間となる）……昭和二年から同一五年まで

e. 別間二棟型（両廊下型の両側が別間となる）……昭和二年前後から同四〇年頃まで

f. 二層化した御殿（屋根が多層化する）……昭和三〇年頃から

g. 廊下を敷設した御殿（主殿と別間の間に廊下）……昭和三〇年以降

h. 様々な要素の混在した御殿（すべての屋根が多層化し大型化）……昭和三九年

（アルファベットは筆者が便宜上つけた。）

この分類の妥当性はわからないが、少なくともみよし市域とその周辺の御殿飾りの地域性は見えてくる。塚本によれば、a.、c.の型式のものには、主殿の形状、欄間や屋根の表現などに共通性がみられるという。この三型式は同類であり、相互に派生的な関係にあったとする。また、d.は前の三型式からe.への過渡期であり、別間と称しているのは屋根の向きが主殿に対して直角に置いた型式をさす。このe.の別間二棟型が、御殿飾り終末期の昭和四〇年代までみられ、御殿としては長期間の命脈を保っていた。そして、そこから派生したf.は屋根が多層化したもので、まず主殿が二層となり、次に両側の別間が二層となる。そこに廊下を付設したのがg.で、主殿と別間を分ける構造となる。さらに、e.の多層化したh.は、高さ一二〇センチとかなり大型である。

御殿飾りは装飾にも変遷がみられる。昭和六年までは白木製だが、昭和八年から塗りや蒔絵がほどこされるようになる。内部も当初、壁部分は茶色であったが昭和一〇年代半ばから金色となり、第二次大戦後e.はほとんどすべてが金色になっている。また、屋根は昭和一〇年頃から

鯨が飾られ、最晩年まで続く。昭和三〇年前後から千木と鯨木もみられる。一般的に鯨は城郭建築の屋根に、千木や鯨木は神社建築の屋根にみられるものであることから、実際の建築との乖離を指摘している。さらに屋根の表現として、昭和一〇年頃までは檜皮葺、昭和二〇年代頃から瓦葺がみられる。屋根に破風がつくのは昭和一桁後半以降、降り棟がつくのは昭和二〇年前後からである。

このように、御殿飾りの構造や装飾を細部にわたって観察できるのは、毎年展示のために組立をおこなっているからである。よく耳にするのは、組み立てる際に部品が足りなかったり、複雑すぎて組立をやり直したりするということである。なぜ、このように複雑な、しかも時代が下るにしたがって大型化する御殿飾りが増えたのだろうか。そして、このように流行し出回った御殿飾りが、いわゆる屏風段飾りに移行したのはなぜだろうか。

「静岡雛道具」御殿飾りの生産

駿河雛具作りは、すでに江戸時代末期には始まっていた。しかし、駿河漆器の特色を活かして雛道具を製造するようになったのは、明治時代に入ってからである。明治三五、六年（一九〇二、〇三）から日露戦争後にかけて、国内外の漆器産業は不況下にあり、その転向先として雛道具製造へと職人が流れた。この時期から、雛道具を安価に製造し販売する努力を始め、特に御所車、御殿、御駕籠などを作って全国に売り出したという。²⁷大正時代に入ると、雛具商人も増加して特産的地位を築き上げた。大正四年（一九一五）に問屋組合を結成し、東京蔵前の越前屋総本店、日本橋青物町会津屋と連携して販売に力を入れ、「静岡雛道具」として全国的に名声を得るようになる。この当時の産額は約三〇万個を超えたという。

しかし、「静岡雛道具」が全国的な産地の地位を確保したのは大正



藤枝市岡部町の本陣の御殿飾り (c.)



御殿飾り (浜松市博物館) (d.)



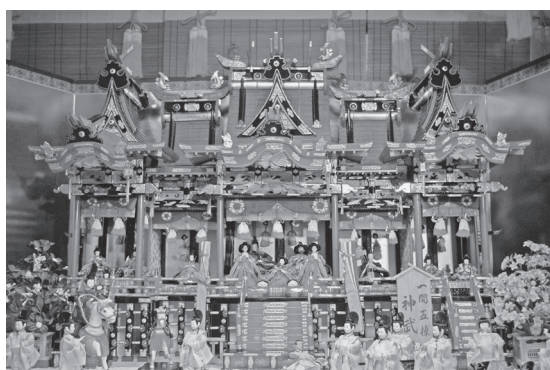
御殿飾り (御殿場市) (e.)



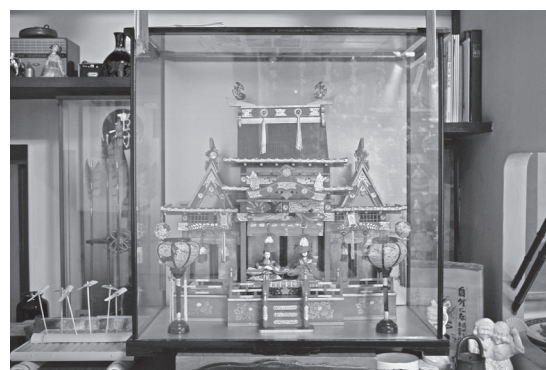
御殿飾り (浜松市博物館) (e.)



御殿飾り (浜松市博物館) (e.)



御殿飾り (柳川市) (h.)



御殿飾り (柳川市) (e.)

一二年（一九二三）頃からで、前述したように関東大震災で罹災した職人が静岡に移住したためである。この時期に御殿に屋根をつけ、各種の工夫をして繊細優雅な技巧を施した。昭和三年（一九二八）の御大典では、紫宸殿作りの御殿が全国を風靡した。すなわち、多くの漆芸職人がかかえた駿河雛具業界で大量生産が可能となり、雛具商人の販路の拡大努力もあって、御殿飾りが広く一般に普及したのである。

みよし市立歴史民俗資料館が収蔵している御殿飾りは、時代と共に多様な形態をもっていた。同館の収蔵品のすべてが駿河雛具の御殿飾りであるとは言えないが、少なくとも昭和二〇年代以降の e、h は静岡産であることに間違いはなさそうである。その根拠は、明らかに他とは異なる屋根様式にある。屋根だけに着目すれば、d もその範疇である。その理由として、第一に瓦葺であること。第二に破風が付随していること。第三に降り棟が加わっていること。さらに言えば、瓦は青色系に塗られていることから、銅板で緑青が出ている様子を表しているように見える。しかも、棟の両端に付けられた鯨が違和感さえ覚える。このようなデザインを静岡の雛道具職人が考案するとすれば、モデルがあつたはずである。

静岡市は江戸時代、駿府の城下町であり、初代将軍徳川家康をまつる久能山東照宮のお膝元である。また、富士山本宮浅間大社の新宮である浅間神社もまつられている。これらの神社は、徳川幕府の厚い庇護により、現在も当時の豪華絢爛な姿をとどめている。静岡浅間神社は駿府の町中にあるため、何度か火災の被害にもあっているが、そのたびに修復されてきた。大拝殿（神部・浅間両神社の拝殿）は切妻造りの初重に入母屋の楼を重ねた外観をもつ建物で、俗に浅間造りと呼ばれる。初重の屋根の正面と背面には千鳥破風をすえ、二階には高欄をめぐるなど、外観からはまるで城郭建築の天守最上部を思わせるようである。⁽²⁸⁾ さらに、久能山東照宮と同様、建物の隅々まで美しい極彩色の彫り物でう

まっている。

御殿飾りは、屋根様式の変化はあるものの、静岡の職人たちが静岡浅間神社の楼閣をもつ大拝殿を参考に考案したものではないだろうか。あるいは、大拝殿に次ぐ由緒と絢爛さを誇る八千矛神社の建物をモデルにしたとも言われている。八千矛神社は、近世は徳川家康の念持仏である摩利支天を祀った摩利支天社であつた。また、御殿飾りに鯨をつけたのも、モデルが城郭建築の天守閣を思わせる拝殿であればこそである。このことを裏付けるものとして、浜松市博物館が所蔵している御殿飾りには、鯨の飾り金具の裏面にツナの缶詰の印刷があり、物不足であつたため缶詰を再利用していることが判明した。⁽²⁹⁾ ツナの缶詰は、当時から清水市（現静岡市清水区）の特産品であり輸出品でもあつたことから、周辺地域で最も入手しやすい金属として利用したと推測される。当時の職人が、身近にあつた寺社建築や素材からヒントを得て作り上げてきたモノが、大量に出回った御殿飾りだったといえよう。

ところが、みよし市立歴史民俗資料館の塚本氏が指摘するように、御殿飾りの大型化が逆に御殿飾りを終焉に追いやったのである。大型化は飾る場所を限定し、住宅事情の変化などとも重なり、大流行した御殿飾りは需要がなくなっていく。時代の風潮を反映して豪壮華美になり、「御殿本来の味合いを失い、組立にも手数を要して、一面不便をきたすように」なる。そこで、デザインを建築家の吉田五十八に依頼して研究を進めたこともあつたという。⁽³⁰⁾ その後の経緯は不明だが、御殿飾りは屏



御殿飾り（浜松市博物館）

風段飾りに取って代わられたことは前述した。静岡県の平成二〇年度の統計によれば、「節句人形・雛人形」の出荷額は九三、四百万円で全国五位、「人形の部品・付属品」つまり雛人形の胴体と雛道具類の出荷額は三〇六、一百万円で全国の四四パーセントを占め、一位となっている。⁽³¹⁾

4 御殿飾りの地域性

御殿飾り発祥の地

現在、七段飾りの雛人形が普及し、一般的にはこの飾り方が手本のよう⁽³²⁾に考えられている。実際、人形店に置かれているカタログにも、最上段には屏風を立てて「親王揃」、その下の段に「三人官女」、その下に「五人囃子」、その下に「随臣」、その下に「仕丁」、下二段には「嫁入り道具」を並べるとしている。このような雛飾りを誰もが購入出来るようになったのは、高度経済成長期以降である。

このような屏風を立てる段飾りは、江戸時代から江戸で流行っていた。江戸時代後期の『守貞謾稿』には、「江戸は壇を七、八階とし、上段に夫婦雛をおく。けだし御殿の形を用ひず、雛屏風の長け尺ばかりなるを立て廻し、前上には翠簾あるひは幕を張り、その内に一対雛を飾る。二段には官女等の類を置く。また江戸には、必ず五人囃子と号け、笛・太鼓・つゞみを合奏する木偶を置く。」とあり、すでに現在に近い段飾りの配置が記されている。⁽³³⁾

一方、京阪の雛遊びは、「壇二段ばかりに赤毛氈を掛け、上段には幅尺五、六寸、高さもこれと同じばかりの無屋根の形を居へ、殿中には夫婦一対の小雛を居へ、階下左右に隨身二人、および桜と橘の二樹を並べ飾るを普通とす。

また近年、豆御殿と号け、尺ばかりにて屋根ある物を造り飾るもあり。」として、無屋根の形（杵）を据えたり、豆御殿という屋根のある物を飾ったりしている。この中に飾るのは、小雛と呼ばれる小型の雛であった。

京都では、内裏雛を飾る館のことを御殿といい、その中に一対の雛を置く形式を「御殿飾り」と呼んでいた。⁽³⁴⁾御殿とは紫宸殿になぞらえたものと考えられており、御殿の屋根を取り払って人形の表情を見やすくしたものを「源氏杵飾り」と呼んでいる。

明治時代になると、御殿飾りは京阪周辺へも広がり、豪華なものから簡素なものまで様々な様式が生まれた。日本玩具博物館では、平成二五年二月二日から四月六日まで、「雛まつり〜御殿飾りの世界〜」として、春の特別展を開催した。この展示品には、明治後期の芥子雛源氏杵飾りや同じく明治後期の檜皮葺御殿飾りのほか、明治末期から大正期の板葺御殿飾りなどが並べられた。以下、展示解説にしたがって京阪地方の御殿飾りの変遷を追ってみる。

明治中期には、大型化した御殿飾りが段飾りの上段に置かれ、勝手道具や江戸町出身の大名道具を模した蒔絵の諸道具も並べられるようになる。明治末期になると、関西地方の大都市にも百貨店が誕生し、三越や高島屋で整えられた五段飾りや七段飾り、御殿飾りが販売される。さらに、大正時代から昭和初期にかけて京阪地域の都市部を中心に御殿飾りが普及する。明治期よりもコンパクトに収納できる一式が作られ、都市住宅での雛飾りに適したようである。

京都とその周辺において製作されていた御殿飾りは、昭和一〇年代に入ると名古屋や静岡など東海地方で量産されるようになる。それまでの貴族文化のミニチュアであった御殿と武家文化のミニチュアである御殿では、美意識に違いがみられるようになる。

ところが、昭和中期には第二次大戦の戦中戦後の物資不足により、雛人形製作は中断する。これは、全国で同様の傾向にあった。しかし、復興が果たされる頃には、関西から西日本一帯にかけてきらびやかな御殿飾りが流行し始める。これらの多くは、静岡や名古屋、讃岐地方製のものであった。しかし、高度経済成長時代に入ると関東製の段飾りが全国

に普及するようになり、地域性はほとんど見られなくなる。

近代化遺産としての駿河雛具

日本では明治維新後、新政府の欧化政策により五節供廃止令が出され、東京・大阪などの人形屋にも大きな打撃を与えた。⁽³⁵⁾しかし、世間の習慣は法令でなくなるものではなく、明治二〇年（一八八七）頃から雛節供も復活していく。⁽³⁶⁾さらに、「日清・日露戦争などをきっかけに、尚武の精神のあらわれとして端午の節句、そしてそれを追うように雛祭りも再び盛んに」なったという。⁽³⁷⁾急激な近代化を進めた結果、その反動の表れとして旧習の文化が復活する皮肉な結果となったのである。

一方、静岡には明治維新によって、多数の下級武士が「お泊まりさん」として移住してきた。そのため、江戸ぶりの雛飾りももたらされたと考えられている。すなわち、それまでは雛壇に内裏雛一対を飾る程度であったものが、雛壇に人形とともに雛道具を飾ることが盛んになったのである。⁽³⁸⁾そして、静岡市の雛人形・雛道具作りに先行してあった漆工芸は、明治二〇年代から欧米文化の影響を受けるようになる。輸出品としても漆製品は人気があり、清水港からはお茶などとともに外国へと運ばれた。

また、第二次大戦後は生産不可能であったが、進駐軍の土産品として人気が出て、少しずつ生産が復興した。昭和二年（一九四七）の「静岡雛具商組合」を皮切りに、同二五年までに次々と同業者組合が設立された。

ところで、戦争中に生産が中断した雛具業界は、どのように生き残っていたのであろうか。雛道具は、京都の「上物」⁽³⁹⁾に対し、数を多くこなす静岡のものは「数物」と呼ばれていた。雛道具の大量生産は、問屋の元でデザインや組み合わせがプロデュースされ、問屋の元にいる種々の職人に注文がまわされる。指物師・挽物師・塗師・蒔絵師・金具師などである。とくに指物は、御殿飾りの部品を組み立てる技術であり、今日

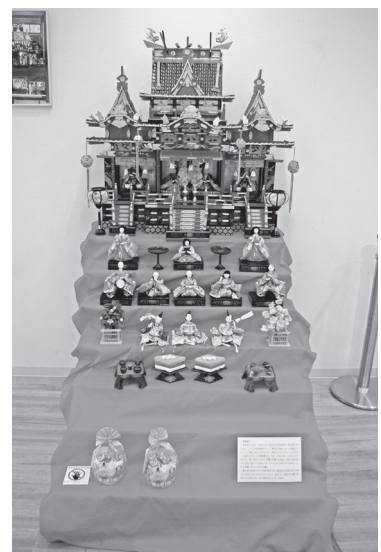
の模型文化の先駆けであった。

静岡では、木工指物で出たヒノキの廃材を利用して、戦前から木製教材模型を作っていた。その先駆けは、昭和七年

（一九三二）に、青島次郎が製造したライトプレーンという模型飛行機であった。これが、昭和一六年（一九四一）国民学校の教材として取り入れられ、生産が急成長したという。ライトプレーンは軍事教育に利用されたが、敗戦後、進駐軍によって製造禁止となった。やがて、教材模型は図工や理科で復活し、昭和三〇年代、団塊の世代をとりこにした。木製模型の組立方法は、まさに御殿の組み立てを受け継ぐものであった。⁽³⁹⁾

駿河雛具の大量生産体制は、近代以降の経済成長に乗じたものであった。その結果、大量の雛飾りと御殿飾りを世に普及させる一翼をになった。駿河漆器とともに、駿河雛具・駿河人形は、ある時期、粗悪品の代名詞となった。それは、清水港から輸出された品々にも同様の非難が浴びせられた。

また、戦時下の教材模型製作は、軍国少年を養成するためであり、生きたために軍需産業に関わった雛具・雛人形業界の人たちも少なくない。木製模型は昭和五年（一九六〇）に木製キットからプラスチック製になり、プラスチックモデル時代が到来する。その先駆けとなったのが、田宮模型の「戦艦武蔵」である。



御殿飾りの飾り方（御殿場市）

近代以降、東京から移住してきた幕臣も生き残りをかけて慣れない細工物に挑戦し、経済発展に寄与してきた。それは、新たな境地を開こうとする進取の気性を静岡人が持っていたからでもある。

おわりに

本論を執筆するきっかけとなったのは、勝浦町の「ビッグひな祭りin勝浦」である。全国から三万体制もの雛人形が寄せられ、それを一堂に展示している迫力に圧倒された。そして、なぜこんなにも大量の雛人形が贈られてくるのか疑問に感じた。さらに、御殿飾りという豪華な作り物が意外に多く展示されていることも気になった。主催者の話によれば、この御殿飾りの生産地は静岡や名古屋だという。そして、この御殿飾りはいつ頃のものなのか、なぜこのように大量に出回っているのかを調べて教えてほしい、と依頼された。

その翌年、愛知県内の雛祭りイベントを巡る機会を得た。そこでも驚いたのは、どこでも「ひなまつりスタンプリィ」が催されており、一日や二日ではすべてを回ることができないほど、多くの雛飾りが展示されていたことであった。

「ひな祭り」イベントが、このように大流行しているのはなぜだろうか。以前、静岡県の稲取温泉で「雛のつるし飾り」の調査をしたことがあった。そこでも、大量のつるし飾りとともに、一日では回りきれないほどのイベント会場の多さと、途切れることなくやってくる観光客の多さに驚かされた。

民俗行事として、家ごとに繰り広げられている雛祭りが廃れたわけではない。しかし、少子高齢化や住宅事情の変化によって、誰もが七段飾りの雛人形を飾ることはしなくなった。そもそもその習慣も、明治に入ってから東京の百貨店がセットものとして売り出したことから始まっている。日本全国に普及するには、かなりの時間を要した。しかし、高価なセッ

トものをデパートで買うということが、高度経済成長期の日本では理想の初節供の祝いであった。

人形は親から子、子から孫へと伝えられ、初節供のたびに買い足され、雛祭りは子ども達の楽しい思い出の一幕となった。ところが、子ども達が成長し、実家を離れることで思い出の人形は飾られなくなっていく。しかし、雛人形はゴミとして捨てるものではない、と誰もが考えている。そこで、小正月のどんど焼きの火にくべて納めたり、人形供養祭があればそこで納めたりした。あるいは、博物館や資料館への寄贈もした。そこに集まった雛人形が、本論が対象とした近代化の中でうまれたモノ資料であった。そして、その大量のモノ資料を生産していたのが、静岡であった。

「ひな祭り」のイベントは、各家に眠っていた雛具・雛人形を再利用し、「雛見」という現代の新しい習俗を生み出している。それは、桃の節供の雛祭りではなく、大量生産品である雛飾りによって支えられているともいえる。

註

- (1) 国立歴史民俗博物館共同研究「民俗儀礼の変容に関する資料論的研究」第4回研究会において、徳島県勝浦郡勝浦町「ふれあいの里さかもと」での講演と配付資料を参考にした。講演は、ビッグひな祭り実行委員会初代委員長の国清一治氏と、NPO法人阿波勝浦井戸端塾の理事長長稲井稔氏による。両氏には、ビッグひな祭りの経緯以外にも、御殿飾りについての興味深い示唆もいただいた。
- (2) 「ビッグひな祭り実行委員会」作成のちらし「ビッグひな祭りの歴史」に、詳細な経緯が記されている。
- (3) 「ビッグひな祭り阿波勝浦」の公式サイト <http://www.bigginamur.jp> より。「四国徳島『阿波勝浦』で始まった元祖「ビッグひな祭り」会場からの情報です」とあり、全国各地の「ビッグひな祭り」の火付け役であることを主張している。これは、「日本一」と称するビッグひな祭りが乱立し、阿波勝浦の「ビッグひな祭り」がいつの間にか「三大祭り」とされてしまったためである。なお、本稿では阿波勝浦のイベント名については「ビッグひな祭り」と表記することとする。
- (4) (3) に同じ。公式サイトによる人形供養の呼びかけが、イベント開幕前の一

月二一日におこなわれている。

- (5) 「ふれあいの里さかもと」のブログより。坂本の「おひな街道」では、かつての雛祭りで「遊山箱」という小型の重箱に「馳走を詰めて雛遊びをした様子が再現されている。

- (6) 公益財団法人名古屋観光コンベンションビューローの公式サイト <http://www.nagoya-info.jp> より。なお、二〇一五年も二月八日から三月一五にかけて同様に「雛巡りスタンプラリー」がおこなわれている。

- (7) 「徳川園」「徳川美術館」「名古屋市蓬左文庫」の各パンフレットによる。なお、蓬左文庫は名古屋博物館の分館となっている。

- (8) 徳川美術館編集発行『尾張徳川家のひなまつり』二〇〇三年

- (9) 特別展「尾張徳川家の雛まつり」(会期 平成二六年二月八日(土)～四月六日(日)、主催 徳川美術館・中日新聞)の展示説明資料による。

- (10) (8)に同じ。福君は婚礼の三年後には夫の斎温を亡くし、その翌年には二二歳の若さで生涯をとじた。

- (11) (8)に同じ。

- (12) 各施設に設置されたスタンプラリーのちらしによる。田原市博物館のホームページにも、平常展「ひな人形と初風展」の展示目録末尾に「ひなまつりスタンプラリー」の案内がある。

- (13) 『静岡浅間神社界隈の民俗 ―静岡市―』静岡県 一九九三年

- (14) 阿部正信『駿国雑志』一八四三年(吉見書店復刻版 一九七六年)

- (15) (13)に同じ。富山昭「マチと家の一年」

- (16) 竹折直吉「第五章 年中行事」『御殿場市史』別巻I考古・民俗編 御殿場市役所 一九八二年

- (17) 植山利彦「志太天神から駿河衣裳雛へ」『静岡の文化』第六〇号 静岡県文化財団 二〇〇〇年

- (18) 竹折直吉「静岡における漆工芸の発祥と発展」『静岡県史』別編I 民俗文化史 静岡県 一九九五年

- (19) 静岡木漆共同職業訓練所編著『静岡木漆産業史』静岡木漆共同職業訓練所 一九六〇年。本書は、編纂委員長が深井幸次郎、編纂担当が伊藤勉である。徳川家に随従した狩野芳崖門下の小栗常蔵らの指導によって明治三三年(一九〇〇)に発足した静岡漆工青年会は、明治四〇年に静岡図案会と改称し、大正から昭和初期にかけて静岡の漆芸意匠にひとつの流れを提起してきた。その後、昭和三三年(一九五八)に静岡木漆共同職業訓練所へと引き継がれた。

- (20) (19)に同じ。

- (21) (19)に同じ。

- (22) 松島徹『静岡雛具人形百年史』株式会社三和 一九八六年。本書は、静岡市内で雛人形製作および販売を手がける三和人形社長の松島氏が著わしたものであ

る。松島氏は静岡雛具工業協同組合理事長や社団法人日本ひな人形協会副会長などを歴任し、長く静岡の雛具・雛人形業界を牽引してきた功労者である。

- (23) (18)に同じ。静岡の漆芸技術と歴史について詳細に記されている。

- (24) (22)に同じ。この中で著者は、その時代に生まれた新しいものを取り入れていかなければ、伝統工芸として生き残ることはできないと述べている。

- (25) (22)に同じ。

- (26) 三好町立歴史民俗資料館編集発行『ひな人形く人形たちの移り変わり』二〇〇八年。この段階で、収蔵している雛人形は約七〇点を数えているという。現在の館名は、平成二三年(二〇一〇)の市制施行により、三好町立歴史民俗資料館からみよし市立歴史民俗資料館に変更された。

- (27) (19)に同じ。

- (28) 静岡県教育委員会文化課編『ふるさと静岡県文化財写真集』第一巻 建造物編 静岡県文化財保存協会 一九九一年

- (29) 浜松市博物館で収蔵品展を担当した名倉千絵氏より教示を得た。

- (30) (19)に同じ。『静岡雛具人形百年史』によれば、吉田五十八設計の御殿飾りは静岡産業館内の博物館に展示されたという。

- (31) 『平成二〇年度 静岡県の産業(商工労働観光編)』静岡県産業部管理局 二〇〇八年

- (32) 吉浜人形『うれしい初節句』二〇一四 SPRING VOL.7 名古屋リビング新聞社 二〇一四年

- (33) 喜田川守貞『近世風俗志』巻之二六 一八三七～五三年頃(岩波文庫版 二〇〇一年)

- (34) 日本玩具博物館の公式サイト <http://www.japan-toy-museum.org>・二〇〇八年春の特別展「御殿飾り雛」解説より

- (35) 是澤博昭『日本の雛人形』淡交社 二〇一三年

- (36) 皆川美恵子『雛の誕生 ―雛飾供に込められた対の豊穡―』春風社 二〇一五年

- (37) (23)に同じ。

- (38) 大村和男「しずおかの小さきもの 雛道具からプラスチックモデルまで」『静岡の文化 特集静岡の雛人形』第六〇号 静岡県文化財団 二〇〇〇年。大村はこれに先行して、静岡市立登呂博物館特別展「小さなもののへの愛情 ―静岡ミニチュア文化史―」(一八八九年四月一日～五月三〇日)を開催し、その展示図録解説を担当している。

- (39) (38)に同じ。

(愛知大学非常勤講師、国立歴史民俗博物館共同研究員)
(二〇一六年三月一八日受付、二〇一六年八月一日審査終了)